

2. アウグスティヌスにおける知恵の探求は、単なる知的な営みに留まらず、探求のための生活の改善・節制を含むものであった。中世における「修道的生における観想」の伝統は、何らかの仕方でのアウグスティヌス的探求に繋がるものではないか。

この結論は、哲学史の常識とも言えるものであり、格別目新しいものではないが、われわれは、今回のシンポジウムと特別報告を通してその幾つかの局面の詳細を垣間見ることができたことを幸いとしなければならない。

〈提 題〉

アウグスティヌスとプラトニズム

松 崎 一 平

0. はじめに

周知のように、哲学と若きアウグスティヌスとの、劇的といつていい出会い（373年か374年のカルタゴでのできごと）が、『告白』第3巻に回想されている。十九歳の若者は、修辞学のカリキュラムの最終段階で、弁舌をみがく教材としてケクロの『ホルテンシウス』を読んだものの、学ぶべきとされていた修辞の巧みさにはそれほどひかれず、むしろその書物の勧める「知恵への愛」、すなわち哲学的探求へと燃えあがった。そのとき若者のもとにやってきた哲学とはなんだったのか、アウグスティヌスの内的と外的との生の軌跡に照らして考察してみることで、与えられた課題を果たしたい。

1. 『ホルテンシウス』体験とは？——『告白』第3巻第4章7-9節

『ホルテンシウス』との出会いは、以下のように回想されている。

じつのところその書（『ホルテンシウス』）はわたしの感情を変えて、主よ、まさにあなた自身へとわたしの祈りを向け変え、わたしの誓願と願望を別なものにした。わたしにとって、とつぜん無価値になった、すべてのむなしい希望が。そしてわたしは知恵の不死を激しく欲した、こころの信じがたい熱で。そしてわたしは起きあがりはじめた、あなたのもとにたちかえるために¹⁾。

まず注意したいのは、Gibb と Montgomery が指摘し²⁾、O'Donnell³⁾や G. Clark⁴⁾も支持するように、『ホルテンシウス』体験がアウグスティヌスの内面に、神への祈りを新たに生じさせたわけではなく、すでにあった祈りの内実を変え、誓いと希望を別なものにしたといわれている点である。『ホルテンシウス』が青年の内面を激変させたにしても、青年はそれまでも神に願ってはいた。Gibb と Montgomery が示唆するように、『告白』第 1 巻第 9 章で、初等課程で学ぶ少年が、学校でむち打たれないように神に懇願したことが回想されている⁵⁾。そこで少年は、自分がむち打たれないように、一心に願っている。しかしその祈願には、神のもとにたちかえりたいといった気持ちは含まれてはいなかった。第 1 巻の後半や第 2 巻の回想によれば、少年のこころは、むしろいっそう神から遠ざかった。それにたいして『ホルテンシウス』は、神にたちかえるように青年を起きあがらせ、青年は神のもとへとたちかえるべく祈るようになった。『ホルテンシウス』体験以前の青年の誓願や願望は、かれが修辞学の修得を足がかりとして希求していた地上的な価値、おそらく地位や栄誉、富の獲得にかかわるものだった。『ホルテンシウス』を読むことでそれらへの望みが後退し、不死の知恵の獲得を強く望むようになったというのである。

1) *Conf.* III, 4, 7. 以下、『告白』については書名を省略する。なお、アウグスティヌスの著作は、*Corpus christianorum* に所収のものを使用した。未所収の場合は、使用したテキストを簡単に注記した。

2) John Gibb and William Montgomery (ed.), *The Confessions of Augustine*, Cambridge U. P., 2nd ed. 1927, p. 58.

3) James J. O'Donnell, *Augustine: Confessions*. Introduction, text and commentary. 3 vols., Oxford U. P. 1992, II, *Commentary on Books 1-7*, p. 166.

4) Gillian Clark (ed.), *Augustine, Confessions, Books I-IV*, Cambridge U. P., 1995, pp. 143-144.

5) I, 9, 14, *Nam puer coepi rogare te, auxilium et refugium meum, et in tuam inuocationem rumpebam nodos linguae meae et rogabam te paruus non paruo affectu, ne in schola uapularerem.* イタリアック体は筆者による。

アウグスティヌスは、そのときの自分をさらに回想する。

いかにわたしは燃えあがったことか、わたしの神よ、わたしはいかに燃えあがったことか、地上的なものからあなたのもとへ飛びもどろうと。しかもわたしは知らなかった、いったいあなたがわたしをどうしようとしているのか、を。じっさい、あなたのもとに知恵はある。ところで、知恵への愛 (amor sapientiae) は、哲学というギリシア語の名をもち、その書はそれによってわたしに火をつけた⁶⁾。

うえにつづく回想を踏まえると、青年が燃えあがった対象は、『ホルテンシウス』のなかで批評的に説明されている哲学諸派ではなく、「知恵そのもの」 ipsa sapientia だった。そのことを、アウグスティヌスは、「人間たちの伝統に従う、むなしい、虚偽の哲学」を退け、キリストに従うように命じるパウロのことば (コロサイ書、第2章8節) に適うことだったとふりかえている。だからといって、哲学を求めなかったわけではない。知恵そのものを愛し求めたということは、最高の知恵を希求したこと、あるいは真の philosophia を求めたことと考えていい。引用文中の「あなたのもとに知恵はある」は、真の知恵を神のみことばとするカトリック教会の教えを踏まえた、ヒッポ・レギウスの司教の『告白』執筆時の立場からの説明である。

『ホルテンシウス』体験について、『告白』の記述から確認できることは、青年が、特定の学派ではなく、真の、あるいは最高の知恵に、知恵そのものへの愛に捉えられたということ、そしてそれによって、求めてきた地上的な価値を軽んずるようになったということである。さらに、神への祈願は、『ホルテンシウス』体験によって新たに始められたわけではなく、少年時代からおこなわれてきたことであり、体験がもたらしたのは、むしろ内容の変容と考えられる。その点で、キケロに勧められて開始した知恵の探求にキリストの名がなく、水を差された気がしたという第8節末の回想は、アウグスティヌスが少年時代から、母の信仰の対象であったカトリック教会の神に祈願していたことを考えれば、首肯できる。

このように『ホルテンシウス』体験は、少年時代以来一貫してキリスト教の域内にありはしたものの、神から遠ざかりつつあった青年が神に向

6) III, 4, 8.

かって歩み始めた、いわば折り返し点である。『告白』の自伝的記述から推測すると、おそらく『告白』の著者は、自分が神からもっとも遠ざかった時期を、第2巻で回想される十五、六歳のころと考えていた。

それではアウグスティヌスは、なんのために知恵そのものを、真の哲学を求めようとしたのか。『幸福の生について』などによると、かれは、「わたしたちはみな幸福でありたいと望んでいる⁷⁾」という、『ホルテンシウス』のキケロの考えに賛同し（つまり幸福への希望を自覚し）、幸福にいたるためには「適正なもの」を望まなければならないという勧め⁸⁾に応じようとしたのである。むろん、そのときに幸福を初めて望んだわけではない。少年がむち打たれないように神に祈ったとき、少年にとって、むち打たれない（肉体的な痛みを被らない）ことが幸福だった。『ホルテンシウス』体験をとおして幸福の意味が変容し、精神が「知恵の不死」*immortalitas sapientiae*をめざすことが、幸福を実現するための道として青年に受け入れられた。たましいの不死の確信を志向していたのなら、青年はすでにプラトニズムの枠内にあった。

2. その後の哲学のいとなみ

『告白』によると、知恵の探求の場としてアウグスティヌスは、まず聖書を開いたものの、おそらく文章の粗野・素朴に失望してマニ教に参加する⁹⁾。マニ教が、カトリック教会の教えの不合理を批判して、自分たちこそ真のキリスト教だと主張し、自分たちの教え（真理）の合理性を吹聴していたことから推すと、アウグスティヌスはキリストの名を見いださうる哲学としてマニ教を選択したと考えられる。マニ教は、「悪はどこから来るのか」、「物的な形象によって神は限定され、髪や爪をもつのか」、「一度にたくさんの妻をもち、人々を殺害し、動物たちから生け贄をささげた者たちが、義人と評価されるべきなのか」と、カトリック教会の教義や旧約聖書の内容に疑義を呈し、哲学をこころざした青年は、それらの疑

7) *De beata uita*, 2, 10.

8) *ibid.*, Nam in Hortensio, quem de laude ac defensione philosophiae librum fecit: *Ecce autem, ait, non philosophi quidem, sed prompti tamen ad disputandum omnes aiunt esse beatos, qui uiuant ut ipsi uelint. Falsum id quidem; uelle enim quod non deceat, id est ipsum miserimum. Nec tam miserum est non adipisci quod uelis, quam adipisci uelle quod non oporteat. Plus enim mali prauitas uoluntatis adfert quam fortuna cuiquam boni.* 下線は筆者による強調。

9) III, 5, 9-6, 10.

間に賛同した¹⁰⁾。はじめの二点は、悪の起源と神の本性の問題であり、カトリック教会の創造理解にたいする疑義である。第三の間は、旧約聖書の義人たちの道徳性への疑義である。カトリック教会にたいする批判に共感したものの、マニ教の説明にはとうとう納得することができず、アウグスティヌスはミラノで「プラトン派の書物」と出会い、カトリック教会の教えを理解する糸口を得る¹¹⁾。

『告白』第3巻—第7巻に回想される時期、神や被造物の理解の試みは、修辞学者としてのキャリアを積み重ねるかたわら、余暇を利用しておこなわれた。『美と適合について』にかかわる回想場面¹²⁾から見て取れるように、ひとり思考に沈潜することもあった。同志たちとの哲学的な対話も、しばしば試みられたはずだ。じっさい、回心後、カシキアムにおいて待望の余暇を享受すると、いずれもころゆくまでおこなっている。

第6巻では、ミラノの修辞学教師の地位に伴う世俗の煩わしさをいとわしく思ったことが回想されている¹³⁾。そのなかの一節をあげる。

そしてわたしは、大いに驚いた、知恵への熱意 (studium sapientiae) に燃えあがったわたしの十九歳の年——知恵が見いだされたあかつきには、虚栄の欲望へのむなしい希望とおかしな嘘をみな捨て去ろうと考えていた——からどれほどの時間が経ったかを、じっくりと思い起こしながら。みよ、もう三十歳なのにわたしは、逃げていきわたしをだめにするいまあるものを享受したいという貪欲のために、同じ泥のなかに張り付いて過ごしながら、いう、「明日は見いだすだろう。みよ、明白なことが現れ、わたしはそれを捉えるだろう。みよ、ファウストゥスがやって来て、すべてを解明するだろう。……¹⁴⁾」

さらに、学問上の同志とともに財産を共有化し閑暇を享受したいと強く

10) III, 7, 12, Nesciebam enim aliud, uere quod est, et quasi acutule mouebam, ut suffragarer stultis deceptoribus, cum a me quaererent, unde malum et utrum forma corporea deus finiretur et haberet capillos et unguis et utrum iusti existimandi essent qui haberent uxores multas simul et occiderent homines et sacrificarent de animalibus. ... イタリア体は筆者による強調。以下、同じ。

11) VII, 9, 13.

12) IV, 13, 20-14, 23; 15, 27.

13) VI, 11, 18-20.

14) VI, 11, 18.

望んだが、女性たちの同意が得られる目算がなく断念したことが語られる¹⁵⁾。

『ホルテンシウス』体験以後 10 年余りの期間、哲学的な探求を継続しながらアウグスティヌスは、修辞学教師のキャリアを追い求め、アデオダトウスの母との生活を継続し、婚約にともない彼女と引き離されたあとも、べつの女性を得た¹⁶⁾。荣誉や肉欲の獲得と哲学との両立を試みて苦労を重ね、哲学への専念をしだいに望むようになっていった。その望みは、386 年夏の回心につながる。『ホルテンシウス』体験を回想する、回心前後のアウグスティヌスのことばに耳を傾けよう¹⁷⁾。

(1) 『告白』第 8 卷第 7 章 17 節

回心の最終段階を回想するところで、アウグスティヌスは、宿所を訪れた同郷の官吏ポンティキアヌスから、二人の若き官吏のトリニアにおける回心譚と、かれらの婚約者が二人に倣ったことを知らされたあと、『ホルテンシウス』体験をふりかえり、自分の来し方と現状を恥じ、深く反省したと語っている。これは、『ホルテンシウス』体験から 12 年後にミラノで体験した、回心に収斂する内面の葛藤を、それから 10 年余りあとにヒッポ・レギウスの司教が回想したものである。

『ホルテンシウス』を読んで「知恵への熱意」にかきたてられたが、以来およそ 12 年間、「地上的な幸福 (felicitas terrena) を軽視し、知恵の探求に専念することを遅らせてきた」という。さらにかれは、自分が青年時代のはじめに、神に「わたしに貞潔とつつしみを与えてください。だがいまではなく」と願ったという¹⁸⁾。『ホルテンシウス』を読み、肉欲が克服

15) VI, 14, 24.

16) VI, 15, 25.

17) 以下の考察は、主に Harald Hagendahl, *Augustine and the Latin Classics*, Acta Universitatis Gothoburgensis, 2 vols., 1967, pp. 79-94 を参考にした。

18) VIII, 7, 17. Tunc uero quanto ardentius amabam illos, de quibus audiebam salubres affectus, quod se totos tibi sanandos dederant, tanto execrabilius me comparatum eis oderam, quoniam multi mei anni mecum effluerant – forte duodecim anni – *ex quo ab undeuicensimo anno aetatis meae lecto Ciceronis Hortensio excitatus eram studio sapientiae et differebam contempta felicitate terrena ad eam inuestigandam uacare, cuius non inuentio, sed uel sola inquisitio iam praeponebatur erat etiam inuentis thesauris regnisque gentium et ad nutum circumfluentibus corporis uoluptatibus. At ego adulescens miser ualde, miser in exordio ipsius adulescentiae, etiam petieram a te castitatem et dixeram: "Da mihi castitatem et continentiam, sed noli modo".*

されるべきであることを知ったものの、ただちに肉欲を絶ったわけではなく（すでにアデオダトゥスの母と暮らしていた）、知恵の探求の邪魔にならぬようにそれを制御する道を、まずはマニ教に期待したということだ。

(2) 『ソリロキア』第1巻第10章17節

回心後、穏やかな休暇を過ごしたカシキアクムでの内省の一端を反映する『ソリロキア』で、アウグスティヌスは、魂の目（知性ないし理性）の健全さを阻害する身体的欲望について、『ホルテンシウス』を読んで、こころのうちに生じた変化を、おおよそ以下のように回想している。

富については、ただちに望まなくなった。榮譽を求めなくなったのは、つい最近のこと。肉欲についても、「妻を欲しがったり、求めたり、めとったりしないように、わたし自身に命じたことは、わたしのたましいの自由のために正しくかつ有益であったとわたしは信じている」と語っている。周知のように、回心のころアウグスティヌスが婚約していたことを考えると、肉欲にたいする決意も、榮譽にたいするそれと同じ時期のことと考えていいだろう。世俗的な名譽に結びつくミラノの修辞学教師のポストを辞する決断も、独身生活の決意をとまなうカトリック教会の洗礼の決断も、386年夏の回心の前後のことと考えられる。食欲にも言及している。完全に節制的というわけではないが、思考を妨げることもない、といい、食べ物、飲み物、入浴などの、身体の快樂については、なにもたずねないように、理性にむかって頼む。「健康のために役立てられうるものだけを、わたしは求めるのだから¹⁹⁾。」

以上からすると、『ホルテンシウス』体験は青年にたいし、不死の知恵を愛し求める激しい情熱をもたらしたばかりでなく、それを実現するために、富、榮譽などの世俗的な価値を求める欲望の放棄をとまなう具体的な

19) *Sol.*, I, 10, 17, [Ratio] ... Diuitias nullas cupis? [Aug.] Hoc quidem non nunc primum. Nam cum triginta tres annos agam, quattuordecim fere anni sunt, ex quo ista cupere destiti. ... [R.] Quid honores? [A.] Fateor, eos modo ac paene his diebus cupere destiti. [R.] Quid uxor? ... [A.] ... Quamobrem satis, credo, *iuste atque utiliter pro libertate animae meae mihi imperavi non cupere, non quaerere, non ducere uxorem.* ... [A.] ... Cum autem non adsunt prorsus, non audet haec appetitio se inserere ad impedimentum cogitationibus meis. Sed omnino siue de cibo et potu siue de balneis ceteraque corporis uoluptate nihil interroges: *tantum ab ea peto, quantum in ualetudinis opem conferri potest.* (Corpus scriptorum ecclesiasticorum latinorum)

生き方ないし暮らし方を勧めもした。そのことを示唆するのが、十九歳時の体験から 50 年近くを経て 421 年に書かれた『ユリアヌス駁論』に引用されている『ホルテンシウス』の一節である。その箇所では、まさにプラトンの考えとして、快樂を哲学に敵対的とみなし、それを抑えるように命じている²⁰⁾。これは、アウグスティヌスが諸書で引用する『ホルテンシウス』の文章のうち、『三位一体論』第 14 卷第 9 章 12 節や同第 19 章 26 節のもの（思考に専念することによって知性を鋭敏にし、哲学のうちに生きることを勧める）と並び、特に長いものであることを考えると、『ホルテンシウス』のどこが青年の腑に落ちたのかを知るための重要な手がかりである。

しかしながら、『ホルテンシウス』体験以後のアウグスティヌスの歩みは、「知恵の探求」studium sapientiae に持続的に取り組むかたわらで、アデオダトゥスの母親などとの肉的生活をも維持しつつ、世俗の榮譽を求め、修辞学教師のキャリアの上昇をめざすものであった。むしろマニ教徒であったことは、青年が戒律に従い肉欲や食欲を制御しようと誠実に努力したことを意味する²¹⁾。

以上 (1) と (2) にみた回想的記述によると、アウグスティヌスは明らかに、三十二歳のとき (386 年) のカトリック教会への回心を、十九歳で『ホルテンシウス』を読み、こころざした知恵を愛し求める営み、すなわち哲学的探求と軌を一にできごとと捉えている。マニ教への参加もそれからの離脱も、ともにその軌道のうえにあったその営みは、富、地位、榮譽、肉欲、食欲などの処し方と深く関わらざるをえないもの（富への欲望はただちに放棄できたが、肉欲については次善の策を取らざるをえず、

20) *Contra Iul. Pelag.*, IV, 14, 72. Vide quid iste [sc. Tullius] pro uiuacitate mentis contra uoluptatem corporis dicat. «An uero,» inquit, «uoluptates corporis expetendae, quae uere et grauiter a Platone dictae sunt illecebrae esse atque escae malorum? Quae enim confectio est,» inquit, «ualetudinis, quae deformatio coloris et corporis, quod turpe damnum, quod dedecus, quod non euocetur atque eliciatur uoluptate? Cuius motus ut quisque est maximus, ita est inimicissimus philosophiae. Congruere enim cum cogitatione magna uoluptas corporis non potest. Quis enim cum utatur uoluptate ea, qua nulla possit maior esse, attendere animo, inire rationem, cogitare omnino quidquam potest? Cuius autem tantus est gurgis, qui dies et noctes sine ulla minimi temporis intermissione uelit ita moueri suos sensus, ut mouentur in summis uoluptatibus? Quis autem bona mente praeditus, non mallet nullas omnino nobis a natura uoluptates datas?» (Mauri, 1838)

21) モニカが息子と食卓をともにすることを拒んだ (III, 11, 19) のは、かれがマニ教の食生活にかんする戒律を遵守していたためか。

榮譽についてはそれほど深刻に受けとらなかった)と、回心前後の 아우グスティヌスに理解されている。回心とその後のカトリック教会への入信は、『告白』の回想によると、具体的には、ミラノの栄えある修辞学教師のポストを辞することと、独身を決断すること(それはアデオダトゥスの母との離別の原因となった婚約を破棄することを意味した)との、榮譽欲と肉欲の完全な放棄という、生き方の大きな転換を意味した。その転換は、知恵への愛、すなわち哲学の実践をめざすものだったが、それはまさに、哲学に心身のすべてをあけて応えようとする決断だった。さらにいえば、知恵の探求における、禁欲の決定的な重要性を完全に納得した経験だった。

3. 哲学と禁欲

アウグスティヌスにとって『ホルテンシウス』が勧める哲学は、知恵を求める知的なものと、そのために欲望を制御しようとする生活上の努力との二つの層をもっていた。では両者はどのようにかかわるのか。それを考察するための重要な手がかりが、母モニカの生き方である。モニカは、いわゆるオスティアの見神を息子と共有した。『幸福の生について』では、息子が主導する哲学的な対話に参加し、その的確な理解力で息子たちを驚かせた。母は、哲学的な教養を欠いていたにもかかわらず、哲学が探求する知恵にあずかることのできた興味深い人間として、息子によって回想されている。思い切っていえば、息子にとってモニカは、『ホルテンシウス』が勧めた哲学を体現しえた人間だった。そのことは、アウグスティヌスにとって、哲学の二つの層のうち、欲望の制御に傾注される生活上の努力の果たす役割が絶対的に重要だったことを示している。

アウグスティヌスは『告白』第2巻で、思春期の自分の情欲の繁茂に、両親がそれに気づきながらも、結婚による枷をはめなかったことを悔いている。モニカは、「密通したりしないように、とりわけだれかの妻と姦通したりしないように」と、息子に忠告するばかりだった²²⁾。それに続く回想によると、カトリック教会の篤信の信徒であったモニカすらも、息子の情欲の繁茂を容認し、息子の出世を強く望み、それを阻害することを排除しようと配慮していた。アウグスティヌスは、思春期の自分がバビロンの中心でころがっていたといい、たほう母はバビロンの周辺にいたという。

22) II, 3, 7. Volebat ... illa, et secreto memini, ut monuerit cum sollicitudine ingenti, ne fornicarer maximeque ne adulterarem cuiusquam uxorem.

自分と母親とを、前後しながら神をめざして歩む同行者と考えている。カトリック教会の教えも、富の放棄を命じ、禁欲を勧め、地上的な榮譽への執着を戒める²³⁾。だが、アウグスティヌスの回想からすると、かれがその周辺で暮らしたタガステヤカルタゴのカトリック教会が、それらを守るよう信徒たちに厳しく命じていたようには思えない。母は息子が姦通を犯さないかと心配したが、身を賭してそれを阻止したわけではなかった。マニ教が、アウグスティヌスもそのひとりであった聴聞者に命じる禁欲のほうに、カトリック教会のそれに比べるとはるかに具体的で、厳しく感じられたに違いなく、大きな達成感をもたらした。知恵の探求のための禁欲の必要性を理解した青年にとってマニ教は魅力的で、希望をもつことができた。

息子の栄達を強く望むモニカは、『告白』第2巻の時期から15年余りのちのミラノで、栄達に有利なように息子の婚約を整え、長く息子と連れ添ったアデオダトゥスの母を離別させた²⁴⁾。母親は、息子によって自分の榮譽欲を満たそうとしていた。モニカが肉欲や富にたいしてどうであったかはわからないが、おそらくその翌年、息子の回心を知り、「よろこび」、「躍りあがり、勝ち誇り、あなた〔神〕をほめたたえた²⁵⁾。」母は息子に託してきた榮譽欲を克服した。欲望にたいする迷いと決断を、たしかに息子と共有した。

死に臨むモニカの態度もまた示唆に富む。387年の秋、オスティアでアフリカへの船便を待つ宿所の中庭に臨む部屋で、モニカは息子と、「あなた自身〔神〕である現存する真理のもとで、聖なるひとびとの永遠の生はどのようなものか」と語りあい²⁶⁾、「真の知恵」「みことば」に一瞬触れる体験を得ている²⁷⁾。その体験の直後、モニカは息子に以下のように語った

23) II, 3, 8. *Ecce cum quibus comitibus iter agebam platearum Babyloniae et uolutabar in caeno eius tamquam in cinnamis et unguentis pretiosis. ... Non enim et illa, quae iam de medio Babylonis fugerat, sed ibat in ceteris eius tardior, mater carnis meae, sicut monuit me pudicitiam, ita curauit quod de me a uiro suo audierat, iamque pestilentiosum et in posterum periculosum sentiebat, cohercere termino coniugalis affectus, si resecari ad uiuum non poterat; non curauit hoc, quia metus erat, ne impediretur spes mea compede uxoria. ...*

24) VI, 13, 23; 15, 25.

25) VIII, 12, 30.

26) IX, 10, 23. *Conloquebamur ... soli ualde dulciter et praeterita obliuiscetes in ea quae ante sunt extenti (Phil. 3: 13) quaerebamus inter nos apud praesentem ueritatem, quod tu es, qualis futura esset uita aeterna sanctorum, quam nec oculus uidit nec auris audiuit nec in cor hominis ascendit.*

という。

息子よ、わたしについては、この世ではわたしはもういかなるものによってもよろこばされない。この世でまだなにをなすべきか、どうしてこの世にあるべきか、わたしはわからない、この世の希望はもう果たされてしまったのだから。わたしがこの世にもうしばらくとどまりたく思っていた理由はひとつ、カトリック教会のキリスト教徒のおまえをわたしの死ぬまえに見るためだった。わたしの神はわたしにこのことを、このうえなく十分なしかたでお与えになった、——地上の幸福を見下して神のしもべとなったおまえをさえ、わたしは見ているほどなのだから。わたしはいったいこの世でなにをしようか²⁸⁾。

地上の幸福を見下す息子と同じところに、母もまた立っている。そのことは、二人が、『ホルテンシウス』の禁欲の勧めにこたえたことを含意する。見神体験から数日のうちにモニカは死の床に就く。死の床にあってモニカは、夫の墓の傍らに葬られたいとかねてより望み、そのように自分ですでに配慮したにもかかわらず、もうそれをまったく望まなくなったと息子に告げている²⁹⁾。永遠の知恵に触れた母は、禁欲の勧めに完璧に応えることができた。

4. アウグスティヌスのプラトン観——『神の国』第8巻第4章

『神の国』第8巻第4章でアウグスティヌスは、おそらくキケロの諸著作に基づきつつ、「知恵への熱意」について哲学的的に整理している。

知恵への熱意 (*studium sapientiae*) は行為 (*actio*) と観想において展開されるので、したがってその一部門は行為的 (*activa*) と、もう一つの部門は観想的といわれうる (それら二部門のうち行為的のほうは、生をおこなうことに、すなわち、よき生き方を打ち立てることに関与し、たほう、観想的のほうは、自然の諸原因ないしきわめて清らかな真理を洞察することに関与する)。ソクラテスは行為的にお

27) IX, 10, 23-24.

28) IX, 10, 26.

29) IX, 11, 27-28.

いて卓越していたと伝えられている。いっぽうピユタゴラスは、知性の諸力によって可能であった観想的をよりおおく遂行したと伝えられている。ついでプラトンが、二部門を結びつけて哲学を完成したと讃えられている。かれは哲学を三部門に配置した。一つは道徳的(moralis)で、とりわけ行為において展開される。もう一つは自然的で、観想到ゆだねられる。三つ目は、理性的で、それによって真が偽から区分される。それ〔理性的〕は、行為と観想のいずれにとっても必要だが、とりわけ観想が真理の洞察を自らのものとする。それゆえ、これらの三部門構成は、知恵への熱意はみな行為と観想において成立するとするあの区分に対立するわけではない。

いま詳細には踏み込まないが、ここでアウグスティヌスが、哲学はプラトンによって完成されたとし、そのなかにソクラテスを継承するところの、行為にかかわる、moralisな部門を含めている点は興味深い。行為にかかわる部門を、アウグスティヌスは、ad agendam uitam, id est ad mores institutiendosと説明している。「生をおこなうこと、すなわち、よき生き方(mores)を打ち立てることに」ということであろう。さらにアウグスティヌスは、そのすこしあとで、プラトン派の哲学をカトリック教会にもっとも近いと語っている³⁰⁾。

『ホルテンシウス』が十九歳の青年に勧めた哲学が、禁欲的に生きよという、生活上の忠告を含んでいた点からすると、アウグスティヌスはすでに『ホルテンシウス』体験において、上記引用文がいうところのプラトンの哲学と出会っていたと考えていいのではないか、——観想的な部門の歩みの最終段階で、いわゆるプロティノスのプラトニズムが大きな役割を果たすことになるが、それにはるかに先だつて。

哲学の、行為にかかわる部門が、モニカも共有しうるものであれば、その道こそが神の知恵ないし真理に達しうるために絶対的な価値をもつことになる。その道をアウグスティヌスは、若き日、一度はマニ教に求め、最終的にカトリック教会に見いだした。モニカは、一貫してカトリック教会のなかにあつてその道を歩んだ。道は、その道をたどることを決意するひ

30) *De ciuitate dei*, VIII, 5. Si ergo Plato Dei huius imitatore[m] cognitorem amatorem dixit esse sapientem, cuius participatione sit beatus, quid opus est excutere ceteros? *Nulli nobis quam isti propius accesserunt.*

とに、その全貌をあらわす。決意は、どのようになされるのか。

5. むすび

よき道を歩むよき行為は、ときに、見るひとを納得させ、ただちに模倣の対象になる。ソクラテスの生は、哲学的生の理想となり、ひとをその生に倣いたくする。アウグスティヌスは、ソクラテスやプラトンの生き方に倣うべく、哲学をこころざし、修辞学教師のキャリアを重ねつつ、いったんはマニ教に知恵の探求と情欲の制御を期待した。戒律の効果を、いっとき積極的に評価したということ、パリサイ派的時期にあったということだ。マニ教への懐疑が深まった時期に始まったマニ教の司教ファウストゥスとの交流は、若き哲学の徒の、ソクラテスへのあこがれを背景に置いて理解すべきである³¹⁾。知恵の探求については、新プラトン派を知ることで、ひとつの終極に達する。たほう、アウグスティヌスはイエスの生に、ある意味でソクラテスのそれを越える、情欲との戦いの手本、生の手本を見いだす。たとえば回心の最終局面にアウグスティヌス（のたぶん脳裏）に現れた「貞潔」が示した禁欲の手本となるべき人たちが、葛藤の頂点でアウグスティヌスを説き伏せた³²⁾。その後、生を重ねるなか、アウグスティヌスは情欲の克服しがたさを痛感し、神の恵みの絶対性を説く恩恵論を育む。

ソクラテスの、そしてイエスの、死を賭した生のかたちは、圧倒的に説得的である。プラトンが倣い、使徒たちが倣った。倣い倣われるという、ひととひととの結びつきが、哲学のなかに確固たる位置を占めることになった。

31) V, 7, 12, *Nam posteaquam ille [sc. Faustus] mihi imperitus earum artium, quibus eum excellere putaueram, satis apparuit, desperare coepi posse mihi eum illa, quae me mouebant, aperire atque dissoluere; quorum quidem ignarus posset ueritatem tenere pietatis, sed si manichaeus non esset. Libri quippe eorum pleni sunt longissimis fabulis de caelo et sideribus et sole et luna: quae mihi eum, quod utique cupiebam, conlatis numerorum rationibus, quas alibi ego legeram, utrum potius ita essent, ut Manichaei libris continebantur, an certe uel par etiam inde ratio redderetur, subtiliter explicare posse iam non arbitrabar. Quae tamen ubi consideranda et discutienda protuli, modeste sane ille nec ausus est subire ipsam sarcinam. Nouerat enim se ista non nosse nec eum puduit confiteri. Non erat de talibus, quales multos loquaces passus eram, conantes ea me docere et dicentes nihil. Iste uero cor habebat, etsi non rectum ad te, nec tamen nimis incautum ad se ipsum. Non usquequaque imperitus erat imperitiae suae et noluit se temere disputando in ea coartare, unde nec exitus ei ullus nec facilis esset reditus: etiam hinc mihi amplius placuit. Pulchrior est enim temperantia confitentis animi quam illa, quae nosse cupiebam. Et eum in omnibus difficilioribus et subtilioribus quaestionibus talem inueniebam.*

32) VIII, 11, 27.